【表紙】
番号フヰルム
時代劇オールトーキー
水戸黄門廻国記
全十二巻
太秦発声映画株式会社経営　日活営業所
東京市京橋区京橋三丁目十一番地三
太秦発声映画株式会社経営　日活営業所
京都市中京区鳥丸通り三條下ル

【表紙　裏】

【1頁】
水戸黄門廻國記
第一九号
全一二巻　二六二八米

内務省
N二二八三号
□□済

自昭和十四年一月二十一日
至昭和十七年一月二〇日

第一号ノ制限部分本号ニナシ
備考　芸声活動写真
「フイルム式」

【2頁】

【3頁】
梗概1
梗概　水戸黄門廻国記

松平対馬守の行列が箱根峠へさしかゝったとき家老の島田左膳が美しい富士山の姿に思はず“殿様御覧遊ばせ絵にもかけない美事□で御座ります”と申上げたそこで対馬守は行列を止めて駕籠から出て見ると富士山は雲をかむって嶺をかくしてしまったので怒りっぽい対馬守はカンカンになって誰が何と諌言しても動かりともしませんさアこうなると東海道を箱根越えする旅人は立ち往生ではない土下座を二時間も三時間も余儀なくされるので閉口不平の声はあちらこちらに起るがどうにもならない
その時土下座の中から二人の若い男を連れた田舎くさいお爺さんがのこくと立ち上がってつかくと対馬守の傍へ行ったか
と思ふと“これは対馬さんこゝは天下の道路です皆が迷惑しますから退いて下されや”と言ったので対馬守怒るの怒らないの
“何故ぢや・・”と怒鳴ると件のお爺さんニコく笑つて“わしは水戸黄門ぢやが”と言った供の二人と言ふのは言はずと知れた助さん格さんです対馬守はそこで散々油を絞られたことは言ふま

【４頁】
でもない
黄門主従は原宿のますいと言ふ旅籠屋で講釈師掛川□山の□や□の櫻井の別れを聴いていたく感激させられたが、その□上で石川五郎助と言ふよひどれ武士が楠公を悪篤して暴れるので助さん格さんがえい――――とばかりのして縛り上げてしまったがこの事を聞き知った町役人の一隊が押しよせて来て町人の分際で武士を縛るとは怪しからんと三人縛られてしまふはからずも役人の持ってゐた人相書から黄門である事が判りさア一同青くなった
“あゝまた露見致しましたな”と一行は原宿を後に井上備前守の領浜松城下に向って旅立った某頃君主備前守は不可思議な病気のために病床にある家老将監は愛□□を侍らせ□政をほしいまゝにし運良くばお家さ乗取らんと策動してゐた当然領内は麻の如く乱れ卸連営築造のために日々苛酷な労役に追ひ使はれる百姓共の悲惨な有様は顔をそむけるばかりだった
下□した事か□□を聞き伝へた老公、正邪を正さんと堂々□に乗り込み病床の備前守を見舞ひ高倉将監の□を糺弾せんとした

【５頁】
青くなった将監破れかぶれで老公を毒殺せんと企てた、が□って見

破られて助さん格さんに殺されてしまった
今は全く平和に帰した城中の大広間百姓武士が一団となって□□
かな大酒宴の中に百姓姿の老公助さん格さんが音頭を取って踊っ
てゐたかくして老公は次の旅へ――――
終

【６頁】

【７頁、上段】
１Ｔ
第一巻
１Ｔ
ＮＫ（マーク）
日活京都作品
Western Electric
SOUND SYSTEM
THE VOICE OF ACTION
NOISELESS RECORDING
（マーク）
２Ｔ
二十五周年記念
３Ｔ
日活総動員映画
４Ｔ
水戸黄門廻国記
５Ｔ

脚本　瀧川　紅葉

【７頁、下段】
○伴奏

【８頁】
１‐２
６Ｔ
監督　池田　畠保

稲垣　朝一
寺川　十□
田坂　勝彦

7T
撮影　谷本　楕史
吉田　貞次
田村　真須雄
土門　健郎
榎本　義隆

【9頁】
1-3
音楽　高橋　半
録音　金村　利一
〃　山之内　修
編□　福田　理三郎
記録　安田　公義
擬音　尾形　芳唯
設計　猜水　香夫児
〃　武内　一男
照明　浅野　宋次郎
〃　西田　義太郎

【10頁】
1-4
9T
装置　織田　金蔵
〃　吉田　儀一
〃　常岡　卯三郎
衣装　原田　梅雄
美粧　松田　康平
剣道　足立　怜二郎
〃　尾上　小若
字幕　村尾　一友
俳優幹事　西村　治三郎

１０Ｔ
配役

【１１頁】
１-５
１１Ｔ
渥美格之丞　片岡　千恵蔵
水戸黄門　山本　嘉一
佐々木助三郎　阪東　妻三郎
１２Ｔ
森川周馬　月形　龍之介
松平対馬守　尾上　菊太郎
近藤貢　澤村　国太郎
東條右門　澤田　猜
高倉将監　河部　五郎
１３Ｔ

【１２頁】
１-６
竹垣孝仙　高勢　実乗
井上備前守　市川　百々之助
手代久助　市川　正二郎
百姓伊作　原　健作
講釈師□□□山　瀬川　路三郎
茂七爺　実川　延一郎
百姓藤助　藤川　三之祐
１４Ｔ
島田右膳　香川　良介
石川五郎助　尾上　華丈
下杉信平　林　誠之助
宿の亭主金八　尾上　桃華

【１３頁】
１-７
山田源蔵　志村　喬

篠崎玄白　久米　譲
大熊虎之助　賀川　猜
１５Ｔ
薬屋甚兵衛　水原　洋一
飛脚飛助　大崎　史郎
森勘兵衛　仁礼　功太郎
高島七右衛門　椿　三四郎
佃逸平　南城　龍之介
馬子勘八　伊庭　駿三郎
下妻原吾　露口　弘

【１４頁】
１‐８
１６Ｔ
百姓彌吉　葉山　富之助
〃　平助　矢野　武男
〃　孝七　大蔵　多一郎
平野半蔵　八幡　震太郎
番頭喜八　大河原　左雁次
馬干岡六　加藤　弘郎
□川仙助　福井　松之助
１７Ｔ
雲助兵六　片岡　京十郎
百姓六兵衛　葵　武男
〃　吾作　史波　隆介

【１５頁】
１‐９
〃　高六　志茂山　剛
西澤貞了　市川　猿昇
小侍□四郎　近松　龍太郎
〃　□□丞　河瀬　昇二郎
□□　東　武太郎
１８Ｔ
娘　お初　深水　藤子

□□の方　原　駒子
侍女夏江　大倉　千代子
愛妾お勝　中野　かほる
東京多摩川特別出演
娘おさふ　黒田　記代
１９Ｔ

【１６頁】
１-１０
森川の妻お清　櫻木　柚子
飯盛女お百　衣笠　淳子
宿女房おまん　水ノ江　澄子
侍女小笹　清水　照子
〃　楓　比良　多恵子
〃　小菊　香住　佐代子

２０Ｔ
腰元玉笹　近江　富士子
〃　紅葉　沖津　麗子
お作婆　□澤　静子
飯盛女おせん　橘　昇子
〃　おかん　安住　京子
〃　おきん　水谷　新子

【１７頁、上段】
１-１１
街道

【１７頁、中段】
１Ｄ（供先）
下に居れ松平公の御通行ぢや
２Ｄ（家臣達）
下にく（のかけ声以下継続）
３Ｄ（右膳）
暫く休息
４Ｄ（右膳）

殿様絵にも描けぬ此の富士の見事さ御照覧遊ばれませ
５Ｄ（対馬守）
右膳（ハ）富士の頂上がないぞ

【１７頁、下段】
○伴奏
Ｓ金棒の音
○伴奏

【１８頁、上段】
１-１２
【１８頁、中段】
６Ｄ（右膳）
ハいや左様の筈は御座いません
が、富士の頂上はまことに雲の変
化早く唯今迄は見事に見えて
居りましたが
７Ｄ（対馬守）
たわけ奴余を駕籠からなんの
為に下した頂上の見へない富士
を見せて何処が見事ぢや
８Ｄ（右膳）
ハ申訳が御座いません
９Ｄ（対馬守）

【１９頁、上段】
１-１３

【１９頁、中段】
右膳　あの雲を取除け
１０Ｄ（右膳）
ハア（息）ウア　人の力ではなんとも
致し兼ねますが
１１Ｄ（対馬守）
しからば　余を偽って駕籠から下
したのか嘲弄したのか余は富士の

頂上の見えぬまでは一寸も動かん
１２Ｄ（供侍の一人）
おやおやこりやア大変だ富士の頂
上が顔を出さなければ御行列の進
行は出来んのだあの雲はいつ退く
かなア

【２０頁、上段】
１-１４

【２０頁、中段】
１３Ｄ（供侍の一人）
そりやア雲に聞いて見るのが早解
りだよ
１４Ｄ（供侍の一人）
おい茶化すな拙者は心配のあまり
申して居るのだ
１５Ｄ（供侍の一人）
いや茶化すのではない日頃お側衆が
殿様をはれものあつかひにしなんでも御
道理御尤もとあまりあまへかしす
ぎるからこう云ふことになるのだ
１６Ｄ（供侍の一人）

【２１頁、上段】
１-１３

【２１頁、中段】
ウそりゃア拙者も同感だ
１７Ｄ（飛助）
困ったなア
１８Ｄ（雲助）
これぢやおまんまを喰って行ねえや
１９Ｄ（飛助）
お願いで御座います飛脚や□世は
御存知の通り先を急ぐんで御座いますが

何分の御慈悲を持ちまして通行
をお許し願えますまいか
２０Ｄ（山田）
ならんおそれ多くも松平対馬守様の

【２２頁、上段】
１-１６

【２２頁、中段】
御前を追い越えんなぞとは無礼千
萬控えて居れ（ハ）貴様もか退がれ
２１Ｄ（黄門）
（息）ウ助さん（ハ）格さん（ハ）こりやと
つても待っては居られんわい（息）ウ
一と足先へ通して貰いませうか
２２Ｄ（格之丞）
ではさう致しませうか
２３Ｄ（黄門）
あゝ助さん一つ先へ行ってみてください
２４Ｄ（助三郎）
ハ承知致しました

（第一巻終）

【２３頁、上段】
２-１
街道

【２３頁、中段】
第二巻
１Ｄ（山田）
こりや（ハ）貴様達は何処へ行
くんだ（ハ）立はだかって尾籠千
萬下におれ
２Ｄ（助三郎）
ハッ実は親戚の者が危篤で御

座いますのでェ先をせいておりま
す御憐愁をもちましてお通し
下さるわけには
３Ｄ（山田）
ならんく貴様達だけと

【２４頁、上段】
２‐２

【２４頁、中段】
云ふやうな不公平な処置がと
られるか（ハ）殿様御通行ののち
に通れ
４Ｄ（格之丞）
ハそれでお殿様は何時頃お発
ちで御座りませうか
５Ｄ（山田）
ウゥお立かウーそれはウン
６Ｄ（格之丞）
でとのさまはいつごろお立ち
でございませうか
７Ｄ（山田）

【２５頁、上段】
２‐３

【２５頁、中段】
ウウウそれはそのなんぢや拙者で
は解らんアノ雲と殿様の御気分
だけは自然の成行きにまかすほかはな
いのぢや
８Ｄ（格之丞）
（助三郎）
（笑）
９Ｄ（格之丞）
これァいけませんな助さん行きま

せう
１０Ｄ（助三郎）
行きませうさ
１１Ｄ（山田）

【２６頁、上段】
２-４

【２６頁、中段】
こりや無礼者
１２Ｄ（家臣混声）
こりや無礼者
１３Ｄ（黄門）
ウアこれくま・・・待ちなさい
待ちなさいァこれこれ警護さん
儂を対馬さんの処へ一寸案内して
下さいェ直々話をしますからま
んざらしらぬ仲でもないからな
１４Ｄ（山田）
なに知らん顔でないそりや爺貴
様少々変だぞ

【２７頁、上段】
２-５

【２７頁、中段】
１５Ｄ（助三郎）
無礼者こら
１６Ｄ（右膳）
殿様折角のお望みなれどあれ
は俗に富士の笠かむりと申しまし
て仲々とれるものでは御座いま
せん
１７Ｄ（対馬守）
それではなぜ余を駕籠から降
した

１８Ｄ（右膳）
ハえその時は確かにあらはれて

【２８頁、上段】
２-６

【２８頁、中段】
おりましたが
１９Ｄ（対馬守）
ハいやくなんと申しても富士の
頂上が見えるまでは余は此処は
動かんのぢゃ
２０Ｄ（山田）
御前へ申上げます
２１Ｄ（黄門）
いやー対馬さんえ久し振りぢやな
２２Ｄ（対馬守）
何奴ぢや無礼者
２３Ｄ（黄門）

【２９頁、上段】
２-７

【２９頁、中段】
儂ぢやよこれ何時も営中で嫌
がられてゐる水戸の毛虫爺ぢやよ
２４Ｄ（対馬守）
ァ・・・これはく思はぬ所で
拝顔仕りますいつにかはらぬ御機
嫌の体を拝し対馬大慶に存じます
２５Ｄ（右膳）
御老公様には御機嫌の態を拝し
島田右膳恐悦に存じます
２６Ｄ（黄門）
ウいやくアもうそんな堅苦

しい挨拶はモ止めにしませう

【３０頁、上段】
２‐８

【３０頁、中段】
ウァ　だが、お察ししますよ　ウ、
な　世間知らずのわがまゝそだち
のお坊ちやんのお守をするのは
こりやなみたいていのことぢやない
のう
２７Ｄ（右膳）
恐れ入りました
２８Ｄ（黄門）
ウお対馬さん　ウウ儂はナこの通
り百姓姿ぢやゥェあなたは立派
なお大名ぢやさアサマ掛けなさい

２９Ｄ（対馬守）
【３１頁、上段】
２‐９

【３１頁、中段】
いやどうつかまりまして（ェ）拙者
より御老公こそサ　御席に
３０Ｄ（混声の内）
（黄門）
いやあなたはお大名ぢやまあかけ
なさい
３１Ｄ（混声の内）
（対馬守）
いや御老公よりどうぞどうぞ
３２Ｄ（混声の内）
（黄門）
いやまア

３３Ｄ（混声の内）
（対馬守）
イヤ御老公よりどうぞく
３４Ｄ（黄門）

【３２頁、上段】
２‐１０

【３２頁、中段】
その謙譲をわきまへらるる貴公が
なぜ諸人の迷惑をかへりみられれん
のかいやこの街道をまさか貴公
一人のもんとは思っておるまいなア
３５Ｄ（対馬守）
ハ決して左様なことは
３６Ｄ（黄門）
ウお坊つちやんの我儘もいゝかげん
になさい
３７Ｄ（対馬守）
ハツ
３８Ｄ（右膳）

【３２頁、下段】
○伴奏

【３３頁、上段】
２‐１１

【３３頁、中段】
では御出立遊ばれませ　それツ
殿のお立ち
３９Ｄ（家臣達）
ハ
ハ
４０Ｄ（重臣の一人）
ハ　殿のお立ち

４１Ｄ（重臣の一人）
殿様のお立ち
４２Ｄ（山田）
おーい殿様のお立ちだぞ
お立ちだぞ集まれっ
４３Ｄ（重臣の一人）

【３３頁、下段】
○伴奏

【３４頁、上段】
２‐１２
松屋

【３４頁、中段】
お駕籠の用意が調いました
４４Ｄ（右膳）
ハ　いざお立ちを
４５Ｄ（対馬守）
誰が立つのぢや行くなら勝手に行
け余は富士の絶頂の見えるまで
は何時迄も此処は動かん　街道
筋の妨げなき様に致せば何時迄
富士を見やうと余の勝手ぢや
４６Ｄ（おかん　亭主　お百混声）
おなじみの松屋で御座います
松屋でございます

【３４頁、下段】
○伴奏

【３５頁、上段】
２‐１３
お泊り下さいませ
お仕たくが出来てます

どうぞお泊りを（等々）
４７Ｄ（混声の内）
（勘八）
へえ旦那お約束の宿場で御座ります
４８Ｄ（おかん　亭主　お百等混声）
（混声）
ハ□松やでございます
どうぞお泊りを（等々）
４９Ｄ（五郎助）
さうかこりやく亭主今宵
【３５頁、下段】
４９Ｄ（一同）
（混声）

【３６頁、上段】
２‐１４

【３６頁、中段】
は投宿の光栄を得さすぞ
５０Ｄ（亭主）
へえどうも有難う存じます
おいお客さんだよ御案内を
５１Ｄ（勘八）
どうも旦那おつかれ様で御座り
□□□どうも
５２Ｄ（信平）
あゝこれ馬子（ハ）賃銀をとらすぞ
５３Ｄ（勘八）
へ、エー（息）
５４Ｄ（信平）

【３７頁、上段】
２‐１５

【３７頁、中段】
一人前が八十文の約束で二人合せ

て六十四文それに十文の酒代をつか
わすから七十四文ぢや
５５Ｄ（勘八）
へ、こりやどうも有難う存じます
５６Ｄ（一同）
（混声）
有難う御座います（等）
５７Ｄ（勘八）
旦那旦那様　これア約束の駄賃と
違ふんぢやねえんですかい
５８Ｄ（信平）

【３８頁、上段】
２‐１６

【３８頁、中段】
何勘定が違ふ（ウ）一人が八十文の
約束で乗ったはずぢや
５９Ｄ（勘八）
へえさうで御座んす
６０Ｄ（信平）
それに十文の酒代をつかはしたぞ
６１Ｄ（勘八）
へえ　しめて七十四文お貰い申し
ましたがこれではちっとばかり足り
ない様に思ふんですがねえ
６２Ｄ（信平）
判らん奴ぢやなア銭貸して見い

【３９頁、上段】
２‐１７

【３９頁、中段】
確か八十文の約束だったのう（ハハ）
ウー拙者の分と先生の分で八十文
の八十文ハっパ六十四文ぢや

６３Ｄ（勘八）
ハハ左様で
６４Ｄ（信平）
それに十文の酒代（さかて）をつかはしたな
６５Ｄ（勘八）
ハ左様で
６６Ｄ（信平）
合せて七十四文ぢや
６７Ｄ（勘八）
あ　なる程

【４０頁、上段】
２‐１３

【４０頁、中段】
６８Ｄ（信平）
七十文　四文（ハヽ）解ったか（ハ）
解ったら帰れ
６９Ｄ（岡六）
それ見ろ旦那が勘定なさるとちやんと合つてるぢやァねえか
７０Ｄ（勘八）
だってお前一人前で八十文だらうそれに二人合せて七十四文ぢやどうも銭が足りねえぢやァねえか
（第二巻終）

【４１頁、上段】
３‐１
松屋

【４１頁、中段】
第三巻
１Ｄ（信平）
解らん奴ぢやなァ銭を貸して見

い　ほら一人前が八十文だらう（へへ）
八十文を八十文でハッパ六十四文ぢや
（へへ）それに十文の酒代をつかわした
らう（へへ）合せて七十四文ぢやァない
か（へへ）それ七十文　四文だ（へへ）解っ
たら帰れ
２Ｄ（勘八）

【４２頁、上段】
３‐２

【４２頁、中段】
へへ一人で八十文
３Ｄ（岡六）
解らねえなァ兄貴八十文と八十文
だらう　ハッパ六十四文ぢやァねえか
４Ｄ（勘八）
ウどうしても銭が足りねえんだもう
５Ｄ（岡六）
ウツー
６Ｄ（五郎助）
ア　馬鹿ッ一文もやらぬ帰れッ
７Ｄ（アハツハヽ）

【４２頁、下段】
Ｓ叩く音
Ｓ倒れる音
Ｓ銭音
Ｓ倒れる音
Ｓ水音

【４３頁、上段】
３‐３

【４３頁、中段】
８Ｄ（おかん声）

エ　嫌ですよ
９Ｄ（五郎助）
サササさう情無く言ふなよ
武士たる者がかように頼ん
で居るんではないかエどうだ
１０Ｄ（おかん）
まあいけずかないそんな冗談
はおよしなさいよ
１１Ｄ（五郎助）
な拙者の男を立てゝくれウ
頼むく

【４３頁、下段】
○伴奏
Ｓ膳碗の音

【４４頁、上段】
３‐４

【４４頁、中段】
１２Ｄ（おかん）
嫌ですよ旦那様冗談ばっかり
仰有って
１３Ｄ（五郎助）
さう振るなよゥ拙者も同じ人
間だぞゥどうだい
１４Ｄ（おかん）
何をするんだよいくら宿場の
飯盛女でもあんまり人をやすく
見るもんぢやァないよ何なんだい人
を馬鹿にしやァがって

【４４頁、下段】
Ｓ足音
Ｓ膳碗の音
Ｓ叩く音

Ｓ足音
Ｓ障子の音

【４５頁、上段】
３‐５

【４５頁、中段】
１５Ｄ（信平）
（笑）先生
１６Ｄ
欠番
１７Ｄ
欠番
１８Ｄ
欠番

【４６頁、上段】
３‐８

【４６頁、中段】
いぢの悪いお嬢さま
２９Ｄ（お初）
（笑）あら又お嬢さまだなんて
む□上げない
３０Ｄ（久助）
お初
３１Ｄ（お初）
ハイ
３２Ｄ
欠番
３２Ｄ
欠番
３３Ｄ
欠番

【４６頁、下段】

Ｓ茶碗の音
【４７頁、上段】
３－９

【４７頁、中段】
３４Ｄ（久助）
（お初）
（笑）
３５Ｄ
欠番
３６Ｄ
欠番
３７Ｄ
欠番

【４８頁、上段】
３－８

【４８頁、中段】
いぢの悪いお嬢さま
２９Ｄ（お初）
（笑）あら又お嬢さまだなんてむ□上げない
３０Ｄ（久助）
お初
３１Ｄ（お初）
ハイ
３２Ｄ
欠番
３２Ｄ
欠番
３３Ｄ
欠番

【４８頁、下段】
Ｓ茶碗の音

【４９頁、上段】
３‐９

【４９頁、中段】
３４Ｄ（久助）
（お初）
（笑）
３５Ｄ
欠番
３６Ｄ
欠番
３７Ｄ
欠番

【５０頁、上段】
３‐１０

【５０頁、中段】
３８Ｄ
欠番
３９Ｄ
欠番
４０Ｄ（助三郎）
こりや（ァ）無礼者（ァ）こりや飯盛　冗談もいゝかげんにせぇ（息）

【５１頁、上段】
３‐１１

【５１頁、中段】
４１Ｄ（お百）
何をこら百姓飯盛くとたくさん
そうに　お前さんだつて
同じ人間だいシ少し力があると思つてか弱い女を倒して偉さうなつらァするない　ふーん

４２Ｄ（黄門）
ウーンさうぢやつた今のはこちらがあやまりぢやつた助さん
４３Ｄ（助三郎）
へえ左様で御座いました
４４Ｄ（黄門）

【５２頁、上段】
３‐１２

【５２頁、中段】
エゥウン私から謝るからウ勘弁して下さい
４５Ｄ（お百）
いゝ歳をしやがつて詫びる位ならしないがいゝや　女だと思って馬鹿にしやァがる　金　金で何事もおさまると思って居るのか　ふん
４６Ｄ（助三郎）
取る取らんはそっちの勝手ぢやァなァ
４７Ｄ（お百）
ぢや貰つといてやらァ
４８Ｄ（五郎助）

【５２頁、下段】
Ｓ小判の音

【５３頁、上段】
３‐１３

【５３頁、中段】
何故そんなに拙者がこわいのか
４９Ｄ（お初）
（泣）
５１Ｄ（五郎助）
アーさう泣かんでもよいだらうウこ

んな生白い弱々しい男より拙者の方
が男らしくつていゝはずだがなァエ
５２Ｄ（信平）
さようで御座りますとも　あんな青
瓢箪形の男に惚れるなんて貴女も

【５３頁、下段】
５１Ｄ（お初）
（泣声）

【５４頁、上段】
３‐１４

【５４頁、中段】
ほんまに物好きやわいなー
５３Ｄ（五郎助）
こら処は何処だ
５４Ｄ（久助）
ハイ神奈川宿で御座います
５５Ｄ（五郎助）
何神奈川親の目を盗んで駈落か
（笑）いやそれもよからう手つ取り早
いが当世だからな（笑）
５６Ｄ（おせん）
石川の旦那貴方に御懇意だと仰
言る方がお部屋で待つて居らつしや

【５４頁、下段】
Ｓ障子の音

【５５頁、上段】
３‐１５

【５５頁、中段】
いますがね
５７Ｄ（五郎助）

ウ拙者には懇意な奴は此の辺にはな
いはづだが
アヽ五月蝿ことぢや
行つてやらうか（ハ）
一寸行つてくるからな待つて居いようこりやどこにも行くなよ
５８Ｄ（信平）
ウツ

【５５頁、下段】
Ｓ金の音
５７Ｄ（お初）
（泣声）
Ｓ立つ音

【５６頁、上段】
３‐１６

【５６頁、中段】
（第三巻　終）

【５７頁、上段】
４‐１
松屋

【５７頁、中段】
第四巻
１Ｄ（五郎助）
あゝこりやこりや拙者に懇意な
方と云ふのは貴公の事か
２Ｄ（格之丞）
やああオヽ　これはこれは久しくお目
にかゝりませんがいつもお変わりなく
御壮健でァ結構でございます
私□□もお蔭様で皆達者で暮
しておりますェどうぞ御安心下
さいませェー

３Ｄ（五郎助）

【５７頁、下段】
Ｓ足音
Ｓ障子の音

【５８頁、上段】
４‐２

【５８頁、中段】
ハハツ　さうか
４Ｄ（格之丞）
あゝ先生様とお別れしてからずいぶん年もたちますが（笑）ちつともお変わりぢやございませんね　あの時のこどもがもう七ツになりますよ（笑）
５Ｄ（五郎助）
成程
６Ｄ（格之丞）
ア月日のたつのは早いものですお別れしてからもう何年になりますかな

【５８頁、下段】
Ｓ煙管の音

【５９頁、上段】
４‐３

【５９頁、中段】
７Ｄ（五郎助）
ウー解らんのう
８Ｄ（格之丞）
で奥様はお達者ですか
９Ｄ（五郎助）
えゝ女房なぞ持った事はないぞ貴様どうかしとるな

１０Ｄ（格之丞）
こらうまくごまかしてもその手には
のらんぞ
１１Ｄ（五郎助）
そりやなにを云ふとるか

【６０頁、上段】
４‐４

【６０頁、中段】
１２Ｄ（助三郎　格之丞　混声）
アこれこれこれ又人様のお座敷
へ這入ってどうもすみません
ハどうもすみません
いやゝ（息）
実はこの男ちよいと頭がぼーっとして
おりますので（息）
さかへりませうく
いやく
いやくもどうもないサかへりま
せうく
どうもすみませんでした
いやくさかへりませうく
（等々）

【６１頁、上段】
４‐５
１Ｔ
ほ之間

【６１頁、中段】
１３Ｄ（信平）
先生（ウ）あれァこれですぜ
１４Ｄ（五郎助）
チエッ人を馬鹿にして行かうか
１５Ｄ（五郎助）

エッ
１６Ｄ（黄門）
何ぞ御用かな
１７Ｄ（五郎助）
ウヽ（笑声）実は座敷をとりちがへてとんだ失礼致した

【６１頁、下段】
Ｓ足音
Ｓ障子の音
Ｓ障子の音

【６２頁、上段】
４‐６

【６２頁、中段】
１８Ｄ（番頭）
駕籠をよんで参りました
１９Ｄ（久助）
ハー有難うございます
２０Ｄ（紫山）
かくてまた賊軍足利尊氏直義は九州の大軍をひきい海陸の二道より都に攻め上るなど聴えければ急ぎ正成を召させ給ひ汝兵庫へ下り新田義貞と力を合はし賊軍を打ち亡ぼすべしと厳命を下し給へり正成勅を奉じて御

【６２頁、下段】
Ｓ扇子の音

【６３頁、上段】
４‐７

【６３頁、中段】

所を退出す正成大盤石の揺ぎ女
き心を持って一族郎党の寡兵
を従へ逆賊尊氏の大軍に当
り一死国に殉じて天下の人心を
激動せんと摂津兵庫へ駒を進
む頃は建武三年五月中旬(なかば)降り
み降らずみ五月雨煙る櫻井の里
正成いかゞ思ひけん一本松のかげ
に馬をとゞめ我子正行を膝元近
く呼び寄せ此の度の戦は所詮
勝利は覚束ない我生きて汝を見
る事これ限りならんこは武士(もののか)の

【６３頁、下段】
２０Ｄ（客）
（鼾）
２０Ｄ（客）
ア熱々
２０Ｄ（助三郎）
アこれアどうも
とんだ　とんだ
失礼を致しました
２０Ｄ（客）
アどうもすみ
ませんでした

【６４頁、上段】
４‐８

【６４頁、中段】
ならい悲しむべき事にあらねどた
ゞ心にのこるは御代の行末我れ討
死の後は天下ことごとく逆賊尊氏
の代となるべし汝も今は十一才父の

遺言をとくと聞分け成人の後は
忠君の志をつぎ一族郎党を狩
り集め金剛山の辺りに立て籠り
もし敵寄せ来らば命は養由
が矢先にかけ義を紀信が忠に比せ
よこれ汝が孝行の第一ぞ獅子は
子を産みて三日を経る時数千丈
の絶壁よりこれを投げ打つその子に

【６４頁、下段】
２０Ｄ（助三郎）
いえどう致し
まして
２０Ｄ（女中）
（笑）
２０Ｄ（老人　客　混声）
（咳）
やかましい
２０Ｄ（老人）

（咳）

【６５頁、上段】
４‐９

【６５頁、中段】
して獅子の牙慨あらば救へざれど
身をはねかへり死する事なしと云ふ
其方とても武士の子ぢや父の云ふ事
聞き分けて是より河内へ立帰れ
ハツトこみ上る熱姿をグッとかみしめ
何処までもと取り縋る正行鎧の
袖を振りはらい恩地立近に後事を
たくしはやこれまでと立上る親子今
生の別れ道河内と兵庫へ右左り八
大龍王山の繁みをついて哀れ声

血になくほとゝぎす鎧の袖にはらはらと落ちたは涙か松の露か

【６５頁、下段】
Ｓ器物の音
２０Ｄ（老人）
（すゝる）

【６６頁、上段】
４‐１０

【６６頁、中段】
２１Ｄ（五郎助）
（笑）講釈師見て来たやうな嘘をつくか（笑）うまく出鱈目を並べやァがったな
２２Ｄ（信平）
ハー左様で
２３Ｄ（五郎助）
（笑）
２４Ｄ（番頭）
（笑）ヘエ若し旦那様お静かに願ひ申ます
２５Ｄ（五郎助）

【６６頁、下段】
Ｓ叩く音

【６７頁、上段】
４‐１１

【６７頁、中段】
なんだと
２６Ｄ（番頭）
ヘエ皆さんが御迷惑でございますから

２７Ｄ（五郎助）
もう一度言って見ろ
２８Ｄ（紫山）
嘶く駒の足並の乱れ勝なる親子
の絆風もなく日も雨雲に包まれ
てしをれ勝なる菊水の旗涙見せ
ねど正成は遠ざかり行く我子の
影見送る感慨無量の思い
２９Ｄ（五郎助）

【６７頁、下段】
Ｓ叩く音

【６８頁、上段】
４‐１２

【６８頁、中段】
鳴いて血をはく廓公か（笑）馬鹿
野郎真面目な面をしてなんだ口先
の出放題を並べやがつて
３０Ｄ（紫山）
なんの意恨があって邪魔□を
なさるのかそれとも読み上げた
筋道に間違いでも御座りますか
３１Ｄ（五郎助）
なんだ間違は大有だこのうそつ
き野郎拙者を誰だと思ふ
３２Ｄ（信平）
石川五右ヱ門の末孫
３３Ｄ（五郎助）
馬鹿（ハ）だまつて居れ（ハ）
（第四巻　終）

【６８頁、下段】
Ｓ叩く音

【６９頁、上段】
５‐１
松屋

【６９頁、中段】
第五巻
１Ｄ（五郎助）
神蔭流木乃葉流一刀流神□二刀流三流
の奥儀を極めた石川五郎助　言葉
を返すと叩きつぶすぞ何なんだ貴様
達はァ何がおかしい何が面白いのだ
こんな講釈を聞いて
２Ｄ（格之丞）
オイ気狂ひ裏へ出ろく
３Ｄ（五郎助）
何に此の素町人　あ痛や　何を

【６９頁、下段】
Ｓ足音
Ｓ物音

【７０頁、上段】
５‐２

【７０頁、中段】
アー
４Ｄ（五郎助　信平　混声）
（悲鳴
コラ　ア痛々々……
何をこら（息）
ア痛タ　痛タ……
あいた：あいた……（等々）
５Ｄ（助三郎）
さァ乱暴がしたければこ―でいくら
でもやんなさいな
６Ｄ（五郎助）

こしやくな腕立てあとでほえ面
かくなよ

【７０頁、下段】
○伴奏
Ｓ倒れる音
Ｓ足音
【７１頁、上段】
５‐３

【７１頁、中段】
７Ｄ（五郎助　信平―助三郎　混声）
畜生
（かけ声）
（息）
ア痛々々……
（叫声）　（等々）
８Ｄ（黄門　客達）
（笑声）
９Ｄ（客）
どうですロほどにもない（笑声）
１０Ｄ（黄門　客達）
（笑声）
１１Ｄ(格之丞)

【７１頁、下段】
Ｓ立廻り

【７２頁、上段】
５‐４

【７２頁、中段】
サ一匹はかたづいたさ助さんこいつ
で一つ面白く遊びませうかい
１２Ｄ（助三郎）
そりやァ面白からうぢやお前さんの

方へやりますよ
１３Ｄ（五郎助）
ウ何糞ウどうだ
１４Ｄ（格之丞　助三郎―五郎助　混声）
何どうだ
ようし
そうら
どつこいしよ
何ゥゥはなさんか何
そそウなにさらすか

【７２頁、下段】
Ｓ足音
Ｓ立廻り
Ｓ足音
Ｓ叩く音

【７３頁、上段】
５‐５

【７３頁、中段】
こらあゥ
来たかほら
どうだ
（叫声）
どうぢや
うぬこら
あっこりや何処へ行くんだく
こゝぢやく　（等々）
１５Ｄ（黄門　客達）
（笑声）
１６Ｄ（五郎助―助三郎　格之丞　混声）
（かけ声）
（叫声）
（息）　（等々）
１７Ｄ（喜八）

【７３頁、下段】
Ｓ足音
Ｓ足音
【７４頁、上段】
５‐６

【７４頁、中段】
此のウ・・・裏で御座います
１８Ｄ（役人）
さうか　それ
１９Ｄ（客達）
（笑声）
２０Ｄ（佃）
乱暴はたらいたのはあいつ等か
２１Ｄ（番頭）
ヘイ左様で御座います
２２Ｄ（佃）
お武家ぢやなかりそめにも両刀を
たばさむ武士たる者いかに乱暴

【７４頁、下段】
Ｓ足音
Ｓ足音

【７５頁、上段】
５‐７

【７５頁、中段】
致せば荒縄をもつて樹木に縛る
とは武士の体面を思はぬ言語同断
の所業ぢや　容赦はならぬ何者が縛
つたか
２３Ｄ（格之丞）
ヱ御役人様に御伺ひ致すますが町人
で御座いましたら　おさむらいさま

がどんな乱暴をされても又刀を
抜いて斬られても御役人様の御出張に
なる迄とりおさえる事も縄をかけ
る事も出来ずぢつと斬られてゐるの
で御座いますか

【７５頁、下段】
Ｓ足音

【７６頁、上段】
５‐８

【７６頁、中段】
２４Ｄ（佃）
ァあながち左様とは申さんが武士
たる者に縄打つとはけしからん
２５Ｄ（格之丞）
それはおさむらいの得手勝手ぢやい
２６Ｄ（佃）
何
２７Ｄ（助三郎）
あもし町人でもさむらいでも乱暴浪
籍をはたらけば同じ罪人でござい
ます　先づ罪人の方からお調べを願
ひます罪もとがもない私共がおし

【７７頁、上段】
５‐９

【７７頁、中段】
かりを受けると云ふ訳は御座いま
せん
２８Ｄ（佃）
ウさては汝等が縄をかけたか
２９Ｄ（助三郎）
ェー実はお察しの通りでございます

３０Ｄ（佃）
ウ怪しからん奴だ此奴等を召縛れッ
３１Ｄ（捕方達）
ハッ
３２Ｄ（黄門）
アヽウいや待ちなさいくア助さん

【７７頁、下段】
Ｓ足音

【７８頁、上段】
５‐１０

【７８頁、中段】
格さんではァ縛って貰ひませうかいェ
このさむらいはな儂がたのんで縛っ
て貰ったのだ罪は同罪だァ儂も縛
って貰ひませうかいウ
３３Ｄ（佃）
よしこいつらに縄を打て
３４Ｄ（捕方）
ハッ
３５Ｄ（黄門―助三郎―格之丞）
（笑声）
３６Ｄ（黄門）
いやこれも又風流ぢやのう（笑）いや

【７９頁、上段】
５‐１１
１Ｔ

通書
□□□中納言
水戸光圀様
……
……
……

……
公儀
目□□中
□□□防□

【７９頁、中段】
これこれお役人さんやァお前さん
はまだ歳が若いからどうも感情
に走っていかん喃
公平無私な裁きをするにはもつと
冷静に事をしらべなければいけませ
んぞう解りましたか
３７Ｄ（佃）
アツア恐れ多い天下の副将軍水戸中納
言光圀公　こりや頭が高い頭が高い
これ縄をとけくしらぬ事とて
お赦し
３８Ｄ（黄門―助三郎―格之丞）

【７９頁、下段】
Ｓ紙の音
３７（捕方）
ハツ
ハツ
Ｓ雑音

【８０頁、上段】
５‐１２
百姓屋

【８０頁、中段】
（笑声）
３９Ｄ（助三郎）
御前とうとうばれましたな
４０Ｄ（黄門）
ウヽ残念ですなァ

【８０頁、下段】
Ｓ戸の音
Ｓ鶏の声
Ｓ虫の声
Ｓ足音
Ｓつるべ音
Ｓ水音
Ｓつるべ音

【８１頁、上段】
５‐１３
百姓屋内

【８１頁、中段】
４１Ｄ（格之丞）
（息）
４２Ｄ（黄門）
アアウー水の音を聞いたら水が飲みたくなつたな
４３Ｄ（助三郎）
ハでは私水を貰つて参りませうか
４４Ｄ（黄門）
ウウ
４５Ｄ（助三郎声）
御免下さい御免下さい
４６Ｄ（老爺）

【８１頁、下段】
Ｓ足音
Ｓ戸の音

【８２頁、上段】
５‐１４

【８２頁、中段】

お誰か外(おもて)を叩いてるぜ
４７Ｄ（娘）
こんなに早く誰でせうな
４８Ｄ（お作）
さ誰だらうな
４９Ｄ（娘）
ああお前は仕度をしておくれ　わしが行ってみるから
（第五巻　終）

【８２頁、下段】
Ｓ足音

【８３頁、上段】
６－１
百姓家

【８３頁、中段】
第六巻
１Ｄ（お作）
どなたぢや
２Ｄ（助三郎）
御免下さいませ
３Ｄ（お作）
何か用かな
４Ｄ（助三郎）
ハイ私共は旅の者で御座いまするが水の御無心が申したいので御座いますが
５Ｄ（お作）

【８３頁、下段】
Ｓ足音

【８４頁、上段】

6‐2

【８４頁、中段】
あゝおやすい事ぢやおやお連
れさんがあるらしいが外は朝露
にぬれると悪いむさ苦しい処だが
内(なか)へ這入って休んで行きなさい
６Ｄ（助三郎）
それではお言葉に甘いて休
ませて貰ひます
７Ｄ（お作）
あ・・遠慮なく遠慮なく
水はな今汲みたてを上げるから
なさあくなかへ這入って休んで
行きなさい

【８５頁、上段】
6‐3
【８５頁、中段】
８Ｄ（助三郎）
えゝお聞きの通り親切なお
婆さんで御座いますから（ウ）
暫くお休みになられましては
９Ｄ（黄門）
ウウでは暫く休ませてもらひ
ませうか
１０Ｄ（格之丞）
さう致しませうか
１１Ｄ（黄門）
いやアア
１２Ｄ（助三郎）
（格之丞）

【データ採録者…大久保陽加】【校正…森田健嗣】

【８６頁】
６―４
【上段】
【中段】
ウ
ア（息）
１３Ｄ（助三郎）
いやアどつこいしよと
１４Ｄ（格之丞）
（息）つかれましたな
１５Ｄ（黄門）
（息）のぞが今日はかはいたな
１６Ｄ（助三郎）
左様で御座います
１７Ｄ（格之丞）
いやー（息）
【下段】

【８７頁】
６―５
【上段】
【中段】
１８Ｄ（助三郎）
アヽゝ（息）
１９Ｄ（助三郎）
お婆さんお邪魔しますね（笑）
２０Ｄ（お作）
いやどうしまして
２１Ｄ（助三郎）
（笑）
２２Ｄ（お作）
家は貧乏だが水だけは自慢
だからね
２３Ｄ（黄門助三郎格之丞混声）
【下段】

【８８頁】
６―６
【上段】
【中段】
いやどうも
（笑）
２４Ｄ（お作）
さ安心して飲んで下さい
２５Ｄ（黄門）
いやアこれはかたじけない
２６Ｄ（お作）
何かたじけない何ぬかす此の罰
あたりめお前さん方に水も茶も
飲ませてたまるものかいこれ
２７Ｄ（助三郎）
これ何をする無礼者
【下段】
Ｓ茶碗の音
Ｓ叩く音

【８９頁】
６―７
【上段】
１Ｔ
御年貢米
【中段】
２８Ｄ（お作）
なんだつて無礼者は其方の事
ぢや此の俵をなんだと思つてけ
つかるもつたいない米の上へ尻を
下しくさつて御領主様にお納め
する此の札が読めんだかね
２９Ｄ（黄門）
そうかそれあ済まんちつとも気
が附かんかつた

３０Ｄ（お作）
【下段】

【９０頁】
６―８
【上段】
【中段】
お前さん（ウ）いゝ歳をして口へ
いれるお飯尻（まんま）えしいてウもつた
いないと云ふ事をしらないのかね
何んと云ふ大馬鹿者
３１Ｄ（格之丞）
イヤ婆さんく　悪気があつてこし
かけたんぢやないつい知らずに
３２Ｄ（お作）
つひ知らづにつてこんな大きな米俵
が目に這入らなかつたのかね
３３Ｄ（格之丞）
（笑）いやこりや恐れ入つた
【下段】

【９１頁】
６―９
【上段】
【中段】
３４Ｄ（お作）
お前さん方はな他人の作つたも
のだからなんとも思はないだら
うが米と云ふものはな並たいて
えで出来るもんぢやなねえぞわ
し等はどんなに汗水たらして作
りおる事かまア一年でも百姓して
見なさいどんなもんか
３５Ｄ（黄門）
いやまつたく申訳ありません私が

悪かつたどうか赦して下さい
３６Ｄ（お作）
【下段】

【９２頁】
６―１０
【上段】
【中段】
いやもうお前さん方の様な人は
休ませてやる事は出来ねえだ
さあみな出て行つてくれ出て行
つてくれ
３７Ｄ（助三郎）
まアお婆さんそうまで云はな
くとも
３８Ｄ（お作）
いやもう何も云ふ事はねえだ
さア出て行つてくれ（ハ）出て行
つてくれ（イヤ）さつさと出て
行つてくれ
【下段】

【９３頁】
６―１１
【上段】
【中段】
３９Ｄ（おさよ）
お婆あさんあんなに悪いと謝つ
てゐなさるのにあんまり頑固が
すぎまする
４０Ｄ（お作）
さあ出た出た
４１Ｄ（お作）
儂は堪忍してやるだがな御年貢
米に尻を下されては御領主様
に済まねえからなうろくし

ないで出て行つておくれよ
４２Ｄ（黄門）
【下段】
４０Ｄ（格之丞）
（息）
えゝどうも
Ｓ足音

【９４頁】
６―１２
【上段】
【中段】
な助さん（ハ）格さん（ハ）
いゝ気持だ喃
４３Ｄ（助三郎）
ハイ左様で御座居ます感心
に領主を尊敬致し（ウ）我
子同然に米を愛しております
４４Ｄ（格之丞）
ウン久し振りに清らかな心にふれ
て思はず目頭を熱く致しました
４５Ｄ（黄門）
うそうぢや喃ウ
４６Ｄ（百姓）
【下段】

【９５頁】
６―１３
【上段】
【中段】
あーあ旅の衆やお早う御座え
ます
４７Ｄ（女房）
あゝお早やう御座います
４８Ｄ（黄門助三郎）
お早やう

４９Ｄ（格之丞）
お早う
５０Ｄ（黄門）
いやー此の城内は実によく政治
の行きとゞいた所だ
５１Ｄ（黄門）
【下段】

【９６頁】
６―１４
【上段】
浜松城下
工事場

浜松藩
御陣屋築造御用地

【中段】
ウ助さん（ハ）どうか忘れない
やうに帳面によくしるしといて
下さいウ
５２Ｄ（助三郎）
ハかしこまりました
５３Ｄ（一同）
（混声）
５４Ｄ（役人）
こら早くしろ
５５Ｄ（役人）
早くせんかこら
５６Ｄ（役人達）
【下段】
Ｓ鍬の音
５４Ｄ（一同）
（混声）

【９７頁】

6―15
【上段】
【中段】
しっかりやれ
こらなまけるな（等々）
57D（森）
こら貴様なまけるな
58D
欠番
59D
欠番
（第六巻終）
【下段】
【98頁】
6―16
【99頁】
7―1
【上段】
工事場
【中段】
第七巻
1D
欠番
2D
欠番
3D
欠番
4D（役人達）
【下段】
S鍬の音
S足音
【100頁】
7―2

【上段】
【中段】
こら早くせい
早く上れ
５Ｄ（役人）
あ御重役いらつしやい
６Ｄ（高島）
皆んな一生懸命やつてるか
７Ｄ（平野）
ハ皆んな一生懸命やつております
容赦なく厳しくやれいゝか
８Ｄ（高島）
ア本日御家老高倉将監様御視察
の筈百姓共を追い立てゝ充分に我
【下段】
Ｓ鍬の音
Ｓ４（百姓の混声）
（混声）
７Ｄ（役人）
は承知いたしまし
たどうも

【１０１頁】
７―３
【上段】
【中段】
我の誠忠を御覧に入れねば相
ならぬぞ
９Ｄ（平野森）
ハア万事心得て居りますハ
１０Ｄ（高島）
宜しくたのむ
１１Ｄ（平野森）
ハ
１２Ｄ（藤助）
伊作よこれ伊作

１３Ｄ（伊作）
（息）
【下段】
【１０２頁】
７―４
【上段】
【中段】
１４Ｄ（藤助）
これ伊作これ伊作
１５Ｄ（伊作）
爺さん何か用かい
１６Ｄ（藤助）
あ寝てるもいゝだからな又役人
に見付かるとふまれたり蹴ら
れたりすると面倒だ仕事はし
づともいゝだからみんなと鍬で
も持ってゐてくんろ
１７Ｄ（伊作）
あ藤助爺さん親切は有難てえが
【下段】
【１０３頁】
７―５
【上段】
【中段】
な俺だって男だ少しは意地も知
ってるんだ
１８Ｄ（藤助）
ウそりやお前の心持ア察してはゐる
んだ
１９Ｄ（伊作）
さうだらう藤助爺さん現在許（いゝ）
婚（なづけ）のお勝を家老の高倉将監の

奴に横取りされてももんく一つ云ふ
事の出来ねえみすぼらしい百姓の此の
身が俺アあいそがつきてしまつた
末の望の絶え果てた伊作だふま
【下段】

【１０４頁】
７―６
【上段】
【中段】
れたつて蹴られたつて誰が真面目
に働くもんか
２０Ｄ（藤作）
（息）そりやわれが口惜しがるのは
無理はねえだ許婚（いゝなづけ）の男を裏切つ
て金と力に惚れ込んでご家老様
のおてかけになるなんて心の腐つ
た女の事なぞ
２１Ｄ（伊作）
あ爺さん意見ならよしてくれど
うせ捨鉢になつた俺だ
覚悟はとうにきめてゐるんだ
【下段】

【１０５頁】
７―７
【上段】
街道
工事場
【中段】
そのかはりにお勝の女（あま）アたゞぢや
置かしねえから
２６Ｄ（六兵衛）
な坪井村のお勝坊も今ぢや金ピカ

ピカのおかいこぐるみであの偉(い)ば
つた姿アどうでエえあれぢやお前
許婚の伊作の口惜しがるのア無理
アねえぜ
２３Ｄ（平助）
さうだとも誰だつて腹が立つよ
【下段】
○ 伴奏
【１０６頁】
７―８
【上段】
休憩所
【中段】
２４Ｄ（六兵衛）
ウ
２５Ｄ（老人）
アアア
ウ
２６Ｄ
（欠番）
２７Ｄ
（欠番）
【下段】
Ｓ茶の音
Ｓ煙管の音
【１０７頁】
７―９
【上段】
【中段】
２８Ｄ
（欠番）
２９Ｄ
（欠番）

３０Ｄ
（欠番）
３１Ｄ
（欠番）
３２Ｄ
【下段】
【１０８頁】
７―１０
【上段】
【中段】
（欠番）
３３Ｄ（藤作）
あ（息）
３４Ｄ（森の声）
仕事にかゝれ
３５Ｄ（百姓Ａ）
あゝまた鳴つてゐやアがら
３６Ｄ（藤作―百姓森等混声）
さアぼつぼつ仕事をしやうか
おい仕事に掛ろう
仕事にかゝらう
相変らず
【下段】
Ｓ盤の音
【１０９頁】
７―１１
【上段】
【中段】
こら早く行かんか
行かな駄目だよ
３７Ｄ（森）
おい貴様行かんか
なぜ貴様仕事に掛らん何の為
に参つてゐるか

３８ＡＤ（伊作）
ア痛ツフン（息）
３８ＢＤ
（欠番）
３９Ｄ
【下段】
Ｓ叩く音
Ｓ叩く音

【１１０頁】
７―１２
【上段】
【中段】
（欠番）
４０Ｄ
（欠番）
４１Ｄ（平野）
うんこらッ
４２Ｄ（森伊作）
うゝ（息）
４３Ｄ（森）
糞
４４Ｄ（平野）
おい森氏オ森氏
御家老様がおへや様御同道で
【下段】
Ｓ瀬戸物の音
Ｓ落ちる音

【１１１頁】
７―１３
【上段】
【中段】
御巡視ぢや
４５Ｄ（森）
何御家老様が

４６Ｄ（平野）
ウン早く行こう
４７Ｄ（森）
ウーンよし
４８Ｄ（伊作）
アツお勝の奴が（息）
４９Ｄ（お勝）
あら
５０Ｄ（高倉）
【下段】

【１１２頁】
７―１４
【上段】
【中段】
あゝどうしたどうした足元に気を
つけてくるんだぞ（ハイ）ウ
（第七巻終）
【下段】

【１１３頁】
８―１
【上段】
仕事場
【中段】
第八巻
１Ｄ（伊作）
畜生今に見ろツ
２Ｄ（伊作）
お勝今こそ思ひ知らせてやるぞ
３Ｄ（大熊）
待て無礼者め
４Ｄ（伊作）
ククはなして呉れクウウ
５Ｄ（高倉）
はなせ

６Ｄ（お勝）
【下段】
Ｓ鍬の音

【１１４頁】
８―２
【上段】
高倉別邸
【中段】
アツ
７Ｄ（百姓藤助混声）
（混声）
おい伊作が斬られた
どうした
ア大変だ
アア伊作が
アヽ伊作が斬られた伊作が斬られた
伊作が
（泣）　　（等々）
８Ｄ（高倉）
喃お勝今頃は冥途で伊作が
そちを恋慕つて泣いて居るぞ
【下段】
Ｓ酒器の音

【１１５頁】
８―３
【上段】
【中段】
９Ｄ（お勝）
またそのやうな厭な事を
１０Ｄ（高倉）
（笑）喃お勝歳をとつた拙者より
假令百姓たりとも若い男が好ま
しからう
１１Ｄ（お勝）

まあどなたに仰せで御座いますの
１２Ｄ（高倉）
（笑）とうく御機嫌を損
じて終ったなア（笑）
１３Ｄ（大熊）
【下段】

【１１６頁】
８―４
【上段】
【中段】
殿お手やわらかにお願ひ致します
１４Ｄ（高倉）
オ大熊か一つつかはさう
１５Ｄ（大熊）
ハー浜松六万石はなんと申して
もあなた様のお心の侭
１６Ｄ（高倉）
コリア左様な事は口に致すもの
ではないお家のために忠義一図に
尽すこの高倉心なき者が聞け
ば妙にうたがふではないか
１７Ｄ（大熊）
【下段】

【１１７頁】
８―５
【上段】
【中段】
ハハこれはどうも
１８Ｄ（女中）
たゞ今御典医篠崎玄伯様がお
越しになりましたが
１９Ｄ（高倉）
ウム玄伯が参ったかアヽ通しておけ
通しておけ

２０Ｄ（女中）
ハイ
２１Ｄ（篠崎）
御申付けの如く殿備前守様の
御病状は決してあれ以上回復な
【下段】

【１１８頁】
８―６
【上段】
【中段】
きやうに計らひましたから御安心
下さいませ
２２Ｄ（高倉）
うむ御苦労であつた喃
２３Ｄ（篠崎）
ハイ
２４Ｄ（高倉）
先だつて頼みし毒薬はまだ調
合は出来ぬか
２５Ｄ（篠崎）
ハツ持参致しております
２６Ｄ（高倉）
【下段】

【１１９頁】
８―７
【上段】
夜の城下町
城中病室
【中段】
大儀であつた大儀であつた
２７Ｄ（近藤）
アつ玄伯殿
２８Ｄ（備前守）
一大事とは何事ぢや

２９Ｄ（高倉）
殿様にはいまだ御嫡子なくお身
に万一の事あらば当井上家は断絶
と相成ますたゞ今のうち御養
子御決定の程を願はしふ存じます
３０Ｄ（備前守）
もつともの儀ぢやそれで其方は
【下段】
○伴奏

【１２０頁】
８―８
【上段】
【中段】
何者を余の養子に推薦致さう
と思ふのか
３１Ｄ（高倉）
親の口より子を褒めるは異なも
のに御座いまするが拙者の二男友
之助は生れつきの利口者故この際
お家の為御養子になし下さらば
３２Ｄ（お豊の方）
あ―高倉（ハヽ）それはなりませぬ
殿様には肉身の和子がおあり
遊ばす
３３Ｄ（高倉）
【下段】

【１２１頁】
８―９
【上段】
【中段】
ハハ―これは初めて承りましたが
事態そのお腹は何方に御座り
まするか
３４Ｄ（お豊の方）

これに居る夏江ぢや
３５Ｄ（備前守）
奥許してくれ
３６Ｄ（お豊の方）
いいへかへつて今となつては倖せ
に存じまする高倉早速其若
を妾の実子として当家のあととり
に致しませう万事その計らひにたの
【下段】

【１２２頁】
８―１０
【上段】
城中大廊下
１Ｔ秘薬
【中段】
みます
３７Ｄ（高倉）
委細承知仕るお家の為御慶祝
申上ます
３８Ｄ（□番）
大丈夫で御座ります
３９Ｄ（高倉）
よし
（第八巻終）
【下段】
Ｓ足音

【１２３頁】
９―１
【上段】
【中段】
第九巻
１Ｄ（小笹）
夏江様大変で御座居ます奥
方様が急なご病気に御座ります

２Ｄ（夏江）
ヱツ奥方様がヱー
３Ｄ（小笹）
サ早うお越し下さいませ
４Ｄ（夏江）
ヱゝ
５Ｄ（楓小菊）
奥方様
【下段】

【１２４頁】
９―２
【上段】
【中段】
気をたしかにお持ち遊ばせ
奥方様く
６Ｄ（夏江）
ア貴女方は何をしておいで遊
ばす早く御典医を
７Ｄ（楓小菊）
ハはいかしこまりました
８Ｄ（夏江）
奥方様気をしっかりお持ちなさ
れませ
９Ｄ（小笹）
奥方様奥方様
【下段】

【１２５頁】
９―３
【上段】
【中段】
１０Ｄ（夏江）
これはどうなされたので御座り
ます
１１Ｄ（お豊の方）

此れも高倉一味の仕業に相違
ない此のまゝすて置けばお家は危
ふし（息）妾しは所詮助かりません
１２Ｄ（夏江）
（泣）あまアそんな気の弱い事
を仰有ひますな
１３Ｄ（お豊の方）
此れ硯を持ちや硯を持ちや
【下段】

【１２６頁】
９―４
【上段】
【中段】
１４Ｄ（小笹）
ハい
１５Ｄ（夏江）
お心をたしかにお心をたしかに
お持ち遊ばせ
１６Ｄ（西山）
典医西澤貞了お見舞に参
上致しました
１７Ｄ（お豊の方）
此れ今這入つてはなりません
１８Ｄ（貞了）
はつ
【下段】
Ｓ足音
Ｓ硯箱の音
Ｓ襖の音

【１２７頁】
９―５
【上段】
森川邸
【中段】

１９Ｄ（夏江）
奥方様しつかりなさいませ気を
しつかりお持ち遊ばせ
２０Ｄ（森川）
ウームこれは容易ならぬお家
の一大事ぢや喃
２１Ｄ（近藤）
はツ
２２Ｄ（夏江）
此の遺書を江戸屋敷へ持ち
行き御家老柴田兵庫様にお
手渡しなしお家を安泰に治め
【下段】
Ｓ水の音

【１２８頁】
９―６
【上段】
【中段】
よとの（泣）奥方様の御遺言で
御座居ました
２３Ｄ（森川）
鬼畜にも等しき奸臣高倉
此の上は一刻（とき）の猶予もなるまい
奥方様の御遺言に元づき江戸
家老柴田兵庫様へお知らせす
るのが何よりの第一ぢや
２４Ｄ(近藤)
仰せにしたがひまして我々兄妹
早速江戸へ出立仕ります
２５Ｄ（森川）
【下段】

【１２９頁】
９―７

【上段】
【中段】
大儀ながらお願ひ致さうが近藤
氏相手は奸智に長けた高倉将
監いかやうなる手段に出るやもは
かられん随分気をつけて喃
２６Ｄ（お清）
なるべく人目をおさけ遊ばした
方がよろしう御座います
２７Ｄ（近藤）
お心ぞえかたじけなう存じます
２８Ｄ（森川）
お清（ハイ）駕籠を云つてあげなさい
２９Ｄ（お清）
【下段】

【１３０頁】
９―８
【上段】
街道
１Ｔ
見付宿
ある安宿
【中段】
かしこまりました
３０Ｄ（黄門）
ウーむウ浜松藩はそんなに乱
れて居りますかな
３１Ｄ（甚兵エ）
そんなそんな処ぢやありません
よ御隠居御領内はまるで火の
消えたやうなさびれ方ですよ
３２Ｄ（黄門）
【下段】
○　伴奏

【１３１頁】
９―９
【上段】
夜の道
【中段】
ウームそれはいけませんなア
３３Ｄ（甚兵ヱ）
兎も角もお殿様の病気につけこんで家老の高倉つて云ふ悪い奴がのさばりやがつて御政治向を滅茶滅茶にしてゐるんですよわつし達の商売もお陰で上つたりでさア
３４Ｄ（駕篭や）
ホイく（のかけ声）
３５Ｄ（大熊）
【下段】
Ｓ煙管の音
Ｓ足音

【１３２頁】
９―１０
【上段】
【中段】
その駕篭待てツ
３６Ｄ（駕篭や）
ワー人殺しだワーワー
３７Ｄ（近藤）
夏江油断すな
３８Ｄ（夏江）
ハイ
３９Ｄ（大熊）
近藤兄妹を逃がすな
４０Ｄ（家臣達）
逃がすな

４１Ｄ（近藤）
【下段】
Ｓ駕篭の音

【１３３頁】
９―１１
【上段】
佐渡や
【中段】
（かけ声）
４２Ｄ（格之丞）
おかみさんく
おいおかみさん
４３Ｄ（おまん）
アハイくくく
４４Ｄ（格之丞）
茶茶茶を呉れ
４５Ｄ（おまん）
アどうも済みませんアどうも
アどうもすみません（息）
４６Ｄ（金八）
【下段】
Ｓ足音

【１３４頁】
９―１２
【上段】
【中段】
嬶アくくおい嬶ア大変だく
４７Ｄ（おまん）
どどうしたんだいお前さん
４８Ｄ（金八）
どうしたもこうしたもないも
んだ（息）今宿外れの一本松で若
い男と娘さんを覆面を着た

大勢の武士(さむらひ)が取り囲んで斬り
殺す処だよ
４９Ｄ（おまん）
まア可哀さうに誰か救ける人
がないものかねヱ
【下段】
Ｓ障子の音

【１３５頁】
９―１３
【上段】
【中段】
５０Ｄ（金八）
俺の手ではおよばねえから
鳶の衆でもたのんで来ようか
５１Ｄ（格之丞）
その女連れと云ふのも武士か
５２Ｄ（金八）
えーえ武士ですよたしか言
葉のなまりでは浜松辺の武士(さむらい)
らしう御座います
５３Ｄ（格之丞）
浜松（ハイ）ウーン
５４Ｄ（黄門）
【下段】

【１３６頁】
９―１４
【上段】
【中段】
ア事情は兎も角だその若い女
連れの男がそりや可哀想だオ助
さん（ハイ）格さん御苦労ぢやが
一つ頼みますぞ

５５Ｄ（助三郎）
ハイ承知しました
５６Ｄ（黄門）
ウン
５７Ｄ（格之丞）
亭主案内しろ
【下段】
Ｓセトモノの音
Ｓ足音

【１３７頁】
９―１５
【上段】
松原
【中段】
５８Ｄ（覆面）
（かけ声）
５９Ｄ（近藤）
妹ツ気をたしかに持てツ
６０Ｄ（覆面助三郎格之丞近藤混声）
（叫声）
（かけ声）
（第九巻終）
【下段】
Ｓ立回り
雑音

【１３８頁】
９―１６

【１３９頁】
１０―１
【上段】
松原
【中段】
第十巻

1D（助三郎外覆面混声）
（かけ声）
2D（格之丞）
こいつは私が引受けた
3D（格之丞外覆面混声）
（かけ声）
（うなり声）
（叫声）
（等々）
【下段】
S立回り
雑音
S水の音
S立回り
雑音

【１４０頁】
10―2
【上段】
安宿
竹垣邸
【中段】
4D（金八近藤黄門其他混声）
（混声）
嬶アぐずくせんと
残念だく
いや御苦労く
大変だ　（等々）
5D（格之丞）
おい亭主ぐずくせんと早く
医者をよんで来い
6D（金八）
はいかしこまりました
7D（金八）
すぐ私の宅へ来て下さいませ
【下段】

S戸の音
S足音

【141頁】
10―3
【上段】
【中段】
8D（竹垣）
アさうかそりやお前他の家とは
違ふんだお前さんの家だ
9D（金八）
来ていたゞけますか
10D（竹垣）
ア断る
11D（金八）
ヘエ
12D（竹垣）
ウお前さんの処には幾ら貸しがあ
ると思ってゐるんだいチツトも払は
【下段】

【142頁】
10―4
【上段】
【中段】
ないで本当に図々しいエ今夜は夜
も更けてるしもうオお断りぢや
13D（金八）
先生先生お金は持つて来ますから
（エ）すぐ来て療治をお願ひ致し
ます何しろ生き死の大怪我で
御座いますから
14D（竹垣）
生き死はお前の方の勝手ぢやない
かお前あのね今迄の貸しをね
全部持つておいでエそんなお前い

つもくたゞあほうか
【下段】
【１４３頁】
１０―５
【上段】
【中段】
１５Ｄ（金八）
生き死はそっちの勝手だなんてひどい事を云やアがる困ったなア
１６Ｄ（竹垣）
やどうも待たせてどうも済まなんだおゝさやりませう
１７Ｄ（竹垣客壷振り等）
あやっていたゞきませう
（三十五字抹消）
【下段】
【１４４頁】
１０―６
【上段】
【中段】
１８Ｄ（格之丞）
（息）ア亭主医者は如何なったんだ
１９Ｄ（金八）
へヱへ先へ金を出さなけりやア来てくれませんので
２０Ｄ（格之丞）
ヱ（息）ウンそんな事で仁術と云へるか藪医者奴（息）
【下段】
Ｓ足音
【１４５頁】
１０―７

【上段】
【中段】
２１Ｄ（竹垣客等混声）
（混声）（笑声）
（三十三字抹消）
（息）ぢや
２２Ｄ（竹垣客等）
さもう一ぺん丁
とねがひませうか
半さア
半花は霧島
丁丁丁丁丁
（等々）
２３Ｄ（竹垣）
【下段】

【１４６頁】
１０―８
【上段】
【中段】
エツお前はなんだネエ
（息）
（叫声）
２４Ｄ（格之丞）
おう亭主薬籠を持つて参れ
２５Ｄ（金八）
ハイ
２６Ｄ（竹垣）
（叫声）
（息）
アヽ痛痛々
これくく
【下段】
Ｓ叩く音
Ｓ足音

【１４７頁】
１０―９
【上段】
宿
【中段】
そんなお前乱暴な事（息）お前
（叫声）（息）
２７Ｄ（黄門）
ウヽイヤーこのぶんならもう大丈
夫ぢやらうウ
２８Ｄ（近藤）
一方ならぬお世話にあいなり（ウ）
なんとお礼を申上げませうか
有難う存じます
２９Ｄ（黄門）
ウヽいやくお礼とはいたみ
いりますよウ
【下段】

【１４８頁】
１０―１０
【上段】
【中段】
３０Ｄ（助三郎）
近藤氏とやら浜松藩の渦巻く
暗流逐一言上致されるがよからう
３１Ｄ（近藤）
ハツ実は
３２Ｄ（格之丞）
（笑）御心配あるな御隠居様
は恐れおヽくも水戸中納言光国
卿なるぞ
３３Ｄ（近藤）
ヱツアツ存じません事とてたゞ今
迄の御無礼平に平にお許し下さ
【下段】

【１４９頁】
１０―１１
【上段】
【中段】
りませ（息）
夏江夏江喜べ我々をお救い下
されしは恐れおゝくも水戸黄門
光国卿なるぞ尚この上御力に縋
り井上家六万石を無事に治
めねばならぬのだなそちも気を
丈夫に持て
３４Ｄ（近藤）
奸臣高倉将監の為に毒害され
し奥方お豊の方様の書置御
□見下されまし恐れながら
【下段】
○ 伴奏

【１５０頁】
１０―１２
【上段】
城中病室
【中段】
３５Ｄ（黄門）
ウゝいやいや直きに待て（ハ）
３６Ｄ（右門）
殿お喜び遊ばしませ
３７Ｄ（備前守）
右門何事ぢやの
３８Ｄ（右門）
ハツ
水戸黄門光国公には殿様の御
病気の御見舞として御登城遊
ばせる由表むきに申越されて御
【下段】

Ｓ紙の音

【１５１頁】
１０―１３
【上段】
高倉邸
【中段】
座ります
３９Ｄ（備前守）
ハハー水府公が直々御見舞下さるとはかたぢけない井上備前守冥迦につきる
４０Ｄ（右門）
ハツ此の右門お迎ひに参上致すで御座りませう
４１Ｄ（大熊）
いよく油断はなりませぬ光国公直々の御見舞は怪しきものに御座ります
【下段】

【１５２頁】
１０―１４
【上段】
【中段】
４２Ｄ（高倉）
ウン老いたりと雖も明智の光国生けて当地は帰されぬ近うかくなれば是非に及ばぬ
（第十巻終）
【下段】
Ｓ衣ずれの音

【１５３頁】
１１―１
【上段】

城中大廊下
病室
【中段】
第十一巻
1D（家臣）
お上り
2D（黄門）
備前殿大層悪いさうぢやがどう
だなウ
3D（備前守）
水府公直々御見舞下され井上備
前守たゞ感銘の外は御座りません
4D（黄門）
（笑）左様に申されてはエ反って恐
縮ぢやエヽ時に備前殿貴殿の
【下段】
○ 伴奏
S足音

【154頁】
11―2
【上段】
【中段】
家中に高倉将監と申す大器量人
があるそうぢやウ此処には居らんのか
5D（高倉）
初めて拝謁仕る拙者当家の家老高
倉将監と申する不束者以後よろしく
お見知りの置き下さりませ
6D（黄門）
ウなある程浜松六万石を我侭自
由に振り回す大器量人だけあつて
ウーン一くせありさうな人相ぢやこ
れぢやア油断もすきもならんわい
オ高倉とやら貴公の顔は先だ
【下段】

【１５５頁】
１１―３
【上段】
【中段】
つて罪に死せし先代伊達家の家老
原田甲斐に□生写しぢやが（息）
何か縁者かなウ
７Ｄ（高倉）
御老公様御冗談も事に依ります（笑）
８Ｄ（黄門）
他人の空似とやらか知らんが原田甲斐
にまったくよく似ておるわ或は心迄似て
居るかも知れん喃（笑）ややどうも歳
をとるとにくまれ口をきいていかん（息）
いや備前殿も高倉とやらも気にかけん
ようにしてくれ（息）な（笑）いやあまりに
【下段】

【１５６頁】
１１―４
【上段】
客殿
【中段】
くまれ口をきくと刃傷をされると大変
ぢやなアヱ
９Ｄ（格之丞光国）
（笑）
１０Ｄ（高倉）
粗茶粗菓なれども御召上り下さりま
せ何か御意に召さぬ事でも御座り
まするか
１１Ｄ（助三郎）
高倉殿貴公毒味致されい
１２Ｄ（高倉）
いかに水府公の御家臣とてあまりに無

【下段】
○　伴奏
S足音

【157頁】
11―5
【上段】
【中段】
礼だ
13D（助三郎）
黙れ貴公饗応役なら何故毒味
して差出さんサア毒味致されい
14D（高倉）
高倉お毒味仕る
15D（助三郎）
（かけ声）
16D（格之進）
（かけ声）
17D（一同）
（かけ声）
【下段】
S茶碗投げる音
S足音
S立回り
雑音
【158頁】
11―6
【上段】
廊下
【中段】
（叫声）
（うめき声）
18D（一同）
（かけ声）
（叫声）
（うめき声）

（第十一巻終）

【下段】
S足音
S立回り雑音

【１５９頁】
１２―１
【上段】
廊下
【第十二巻】
１D（格之丞）
血迷つて騒ぎだて致されるな恐れ
多くも天下の副将軍水戸中納言光
国卿直々当家の紛乱を治める為
に高倉将監をお手打ち遊ばした
おのく心得違ひを致されるな
２D（家臣等）
（混声）
なに狼藉者
３D（右門）
静まれくく
【下段】

【１６０頁】
１２―２
【上段】
【中段】
殿がお成りだぞ
４D（備前守）
待てく此の馬鹿者
余の命も待たぬに何んたる事
ぢや
５D（家臣等）
ハツ
６D（備前守）
重臣高倉将監は我家を横

領なさんとせし大悪人ぢや
奥の病死も誠は彼の毒殺なり
と判明致した
【下段】
【１６１頁】
１２―３
【上段】
城中広間
【中段】
浜松藩の興廃は此の一刻(とき)に定ま
る所ぢや
７Ｄ（右門）
ア
８Ｄ（近藤）
殿殿
９Ｄ（格之丞）
御心たしかに御心たしかに
１０Ｄ（備前守）
何とど御老公に御取りなしの
程を
１１Ｄ（侍女百姓家臣）
【下段】
Ｓ倒れる音
Ｓ足音
Ｓ竹の音
【１６２頁】
１２―４
【上段】
【中段】
（混声）
どうぞお一つ
さいかゞでございます
へ有難うございます

結構でございます
どうぞへへさあ（等々）
１２Ｄ（高島）
何れも本日水戸黄門様此の席
上へ御出席下さる筈身の光栄
此の上もなく何れもたとへ酩酊
致さるゝとも言葉を慎しみ
礼を乱さず十分に御注意下
【下段】

【１６３頁】
１２―５
【上段】
【中段】
されたい
１３Ｄ（一同）
ハツ（息）
１４Ｄ（藤助）
なあ（ア）水戸黄門様と云やァ天
下の副将軍様ぢやねえだか
１５Ｄ（六兵エ）
さうだよ
１６Ｄ（藤助）
そんな偉方がなんで俺がの処へ
お成りになるだか
１７Ｄ（六兵エ）
【下段】

【１６４頁】
１２―６
【上段】
【中段】
さアそれァ解らねえんだよ
１８Ｄ（孝七）
俺ァな（ウ）夢の様に思うて仕方
がねえ

昨日まで牛か馬みた様に叩き
使はれて居た百姓が此のお仏壇
のやうな美しい御殿にまねかれて
御馳走を頂くなんてどうも俺
は腑に落ちねえだよ
１９Ｄ（平助）
ウそうなんだよ昔からこんな
事聞いた事がねえから有難す
【下段】

【１６５頁】
１２―７
【上段】
【中段】
ぎて尻が尻が落ちつかねえだろ
２０Ｄ（孝七）
そうなんだ
２１Ｄ（六兵ヱ）
おーいく爺さんく青鬼
赤鬼とあだなを取った役人衆
が今日は馬鹿に親しむぢや
ねヱか
２２Ｄ（藤助）
おゝ
２３Ｄ（六兵ヱ）
何んだか気味が悪いのう
【下段】

【１６６頁】
１２―８
【上段】
【中段】
２４Ｄ（藤助）
ウ
２５Ｄ（右門）
皆も聞かれい

天下の副将軍水戸先の中納言
光国公お成り遊ばす
御無礼なき様されい
２６Ｄ（近藤）
お成り
２７Ｄ（一同）
ハ（息）
２８Ｄ（黄門）
【下段】
Ｓ衣ずれの音

【１６７頁】
１２―９
【上段】
【中段】
これく
皆さんウさう堅苦しい事は
（ウ）止めにしてさゝ頭を上げて下
さいヱ頭を上げて下さいヱ
２９Ｄ（格之丞）
さアそう窮屈に思つて貰つ
ちやア
酒もうまうないヱささもつとも
つとくつろいで貰ひませうさ
３０Ｄ（格之丞）
ヱさ一つヱ
３１Ｄ（藤助）
【下段】

【１６８頁】
１２―１０
【上段】
【中段】
一つ
３２Ｄ（助三郎）
さ皆さん頭を上げて下さいさ

ヱ一つ参りませう
３３Ｄ（近藤）
参りませう
３４Ｄ（助三郎）
さう堅苦しくては困りますな
３５Ｄ（近藤）
さまひりませう如何ですか一つ
参りませう
３６Ｄ（黄門）
【下段】

【１６９頁】
１２―１１
【上段】
【中段】
ウゝむゝこれく
そんなに遠慮をしては折角御
馳走をする御領主様の志が
無になるぢやないかヱサ今日一日
は無礼講ぢやくウ上下
貴賤の差別をすてゝ生れたま
ゝの赤裸（はだか）の人間になつてウ親し
く飲みませうかい
ウさゝゝゝ
３７Ｄ（百姓）
へ（息）
３８Ｄ（太左ヱ門）
【下段】

【１７０頁】
１２―１２
【上段】
【中段】
何と云ふ有難い御心だらうなア
３９Ｄ（太助）

黄門さんと言ふ方は偉い御方
だなア
４０Ｄ（太左ヱ門）
ウーン
４１Ｄ（一同）
ハゝ
アゝ
４２Ｄ（黄門）
ウ（笑）いいや此れぢや余り
窮屈で仕方ないわしだつてお
【下段】

【１７２頁】
１２―１３
【上段】
【中段】
前さん方だつて同じ人間ぢや
なヱ砕ける時はうんと砕け
ませうさゝまゝ
４３Ｄ（藤助）
ヱもつたいない
もつたいないく
４４Ｄ（森）
ア拙者達は今日まで盲めつ
ぽうに役人なるが故に無理を
通して参りましたが今では全
く目がさめました（ウ）貴公方に
対して面目ない
【下段】

【１７２頁】
１２―１４
【上段】
【中段】
４５Ｄ（平野）

□（しもと）を持つて人間を動かさうと
した拙者達は大馬鹿者であ
りました今迄の事は水に流して
戴きたい（ヱー）
４６Ｄ（侍）
さどうぞ
４７Ｄ（森）
ア一つ戴こう
４８Ｄ（七助孝七平助）
有難うございます
どうも有難うございました
【下段】

【１７３頁】
１２―１５
【上段】
【中段】
有難うございました（等々）
４９Ｄ（孝七）
世の中が始めて明るくなりました
ハイ
５０Ｄ（百姓）
アヽ
５１Ｄ（黄門）
（笑）やァ民百姓は国の宝だ
お前さん方に一生懸命働いて
貰はねばお大名様も城が持て
んウン士農工商一致してうん
と元気で働きませうかい
【下段】

【１７４頁】
１２―１６
【上段】
【中段】

５２Ｄ（百姓一同）
ヱ働きますくく
ヱ働きますくく
働きますくく
５３Ｄ（黄門）
いやそうかウそれはく
いや目出度いくく
芽出ためでたの若松様よ
５４Ｄ（唄）
芽出度芽出度の若松様よ
枝も栄へて葉も茂るよ
エンヤラアレコレサハーセ
【下段】

【１７５頁】
１２―１７
【上段】
城下のはずれ
【中段】
ヨイサエンヤラヤー
芽出度芽出度の若松様よ
枝も栄へて葉も繁るよ
エンヤラヤレコラサハーセ
ヨイサエンヤラヤー
芽出度芽出度
５５Ｄ（黄門）
ハでは皆さんどうか
御機嫌よくお暮し下さい
５６Ｄ（六兵ヱ）
道中御無事を
５７Ｄ（百姓一同）
【下段】
○　伴奏

【１７６頁】
１２―１８

【上段】
１Ｔ
水戸黄門
回国記
終
【中段】
お祈り致します
５３Ｄ（百姓一同）
どうぞ御無事で
【下段】
Ｓ足音

【データ採録者…堀之口真司】【校正…森田健嗣】